

人事異動

冬を引きずった冷たい空気を頬に感じながら、里崎は窓の外をぼんやりと眺めていた。先ほどまでおぼろげだった東の山の稜線が、紫がかった雲を背に、くつきりと浮かび始めている。世の中は急速に変化していくが、朝の清々しい景色は、清少納言が見ていた頃とさほど変わらないのだろうと思いつながら、里崎は朝日が山を越えて来るのを待った。程なく、眩い朝の光が顔を照らすと、それを合図に里崎は名残を惜しんでいた温かい布団から這い出した。おらずとキッチンに向かうと、いつもより多めの豆を挽き、コーヒーメーカーのスィッチを入れた。トースターに六枚切りのパンを二枚放り込み、細かく刻んだベーコンをフライパンで炒め、溶き卵と絡めると、さつと塩、胡椒をふりかけ、焼きあがったパンに挟み込んだ。

いい加減なサンドウィッチを濃いコーヒーで流し込むと里崎は時計に目をやった。六時半。いつもよりずっと早く目が覚めた分、出発までは一時間半も時間があつた。

ゆつくりとシャワーを浴び、支度を整えると、里崎は職員録を手に取り、まじまじと見つめ始めた。「一体、誰がやってくるのだろうか？ あの日からもう一年が過ぎたのか……」と心の中で呟きながら、ひらりひらりとページをめくっていった。

里崎が激務で疲れているにもかかわらず、いつもより早く目が覚めたのには理由があつた。今日は県庁の人事が発表される日なのだ。児童相談所の誰が抜けて、その代わりに誰が入ってくるのか。特殊な仕事を行っている児童相談所にとって、人事異動は所内の戦力が上がるか下がるかを左右する大きなマターだ。

経験豊かな福祉専門職が増えれば戦力アップに繋がるが、里崎のような事務屋が送り込まれてくると、戦力が下がるだけでなく、その素人をケースワーカーに育てるといふ時間と労力も必要になってくる。子どもの命がかかる仕事をしている児童相談所にとって、これほど大きな問題なのだ。

里崎は不安と期待が入り混じる思いで、自宅を出た。運転しながら里崎は、去年の人事異動について思い出していた。不本意な人事異動だったこと。田丸から電話がかかってきていきなり怒鳴り散らされたこと……。そして、赴任してから今までの苦労や感動……。どれもこれもあまりにも劇的過ぎる気がした。

「いろいろあつたな……」

里崎は、小さな笑みを浮かべた。この一年間に起こったさまざまな出来事が、映画を早送りするように次々と浮かんでは消えていった。辛く、悲しい出来事も多かった。だが、そうしたすべての出来事が途轍もなく重く、大切な記憶として里崎の心に刻まれていた。

ハンドルを握る指の一本一本に力がこもつた。

事務所に入るといつもと変わらぬ光景が広がっていた。朝から電話が鳴り響いている。里崎も席につくと早速昨夜の最終面接の記録を打ち始めた。いつもなら驚くべきスピードで記録が綴られていくのだが、今日は思うように文章が浮かんでこない。やはり人事のことが気になっているのだ。

十時には総務課に人事異動の内示一覧がメールされてくる。心なしか事務所全体にもそわそわした雰囲気漂っている気がした。みんな、いつも以上に時計を気にしている様子だ。

「あれ、今頃昨日の面接記録を書いているんですか？ 確か、面接内容はその日のうちに記録するのが里崎流でしたよね？ 有言不実行じゃないですか？ 里崎さん」

里崎が振り返ると、緑川がパソコンの画面に冷たい視線を送りながら立っていた。

「なんだよ、うるさいな！ 昨日の最終面接は「殺してやる！」って連呼されながら十一時までかかったんだ。疲れきってその日のうちに書けない場合だってあるだろ！」

「そりゃあ、ありますよ、私たち凡人にはね。毎日、面接や家庭訪問で追い立てられてるんですから。でも、面接内容はその日のうちに記録するっていうのは優秀な里崎さんがご自分でお決めになったことだと記憶してらんですけど。ねえ、後藤さん」

「そうですね。優々な里崎さんは、私たちと違って記録を打つのが早まって自慢されてましたものねえ。当然、どんな状況でも必ずやってのけるんだらうって、尊敬してたんですよ。残念ですね」

「何が尊敬だよ！ 君たちの表情には軽蔑の二文字しか浮かんでないよ！ 邪魔するなよ、今日は上手く書けなくて困ってるんだから」

慳然とした表情で答える里崎に、緑川が怪しげな笑みを浮かべながらさらりと言った。

「人事異動、気にしてるんでしょ」

「べ、別に気にしてないよ……」

「顔に凶星だって書いてありますよ、里崎さん。ほんとわかりやすいですね」

「ほんとですね。すぐに顔に出ますよね。きゃははははは」

「君たちだって気になってるんだろ！」

「全々然。私と後藤さんは今から家庭訪問に出るんです。人事異動なんて気にしている暇はありませんから。行きましょ、後藤さん」

「はい。しっかり記録書いてくださいねえ、優々な里崎さん。」

そういうと二人はくると背中を向けて、そそくさと事務所を出ていった。

里崎は心の中で小さく舌打ちをすると、落ち着かない様子で再びパソコンのキーを打ち始めた。やっと半分ほど打ち終わったとき、事務所の入り口のドアが開いた。総務課長が異動表らしき書類を片手に一階から上がってきたのだ。彼は、真直ぐに長谷部課長の机に向かって歩いていくとその書類を彼女に手渡した。

「長谷部さん、人事異動の内示です」

「ありがとうございます」

長谷部は受け取った異動表にざっと目を通すと満足げに微笑んだ。そして、それを二部コビーすると、所長室と次長室に一部ずつ届け、その足でニコニコしながら里崎の机にやってきた。

「相棒が来たわよ」

そう一言いうと、異動表を里崎の机に置いた。里崎は慌てて異動表に目を通した。

「あ〜！」

里崎があまりにも大きな声を出したので、周りの職員が里崎の席に集まってきた。異動表には「田丸真理子」の名前がくっきりと印字されていた。

「ほう〜。姉御が戻ってきたね」

司馬が嬉しそうに言った。

「里崎さん、こりゃあ、相当気合い入れないと、怖いよ〜」

中山は、茶化すようにそう言うのと、里崎の肩をポンと叩いた。

ここで、あいつと一緒に仕事をするのか……里崎は田丸の笑顔を思い浮かべながら、とても嬉しく、また、頼もしくも思ったが、身の引き締まるような緊張感も覚えるのだった。しつかりやらないと……里崎は自らに気合いを入れると、背筋を伸ばして、勢いよくキーを打ち始めた。先ほどまでとは打って変わって、キーを打つ指は、ピアノを奏でる如く軽やかに

文章を紡いだ。

記録を仕上げると、里崎はネグレクトケースの家庭訪問に向かうため、中庭の公用車置き場へ向かった。

駐車場横の植え込みでは、三月末の透き通った陽光の中、レンギョウが小さな黄色い花を枝いっぱい咲かせ、暖かさを増した春風と踊っていた。数日前までは葉の落ちた寒々とした枝だけを風に揺らせていたのに、まるでミダス王が触れたかのように全身を黄色く染めている姿は、里崎に生命の力強さを実感させる美しさだった。里崎は暫くその美しさに見とれていた。心がほっとして落ち着いていくのがわかった。

虐待対応に明け暮れていると、目の前で繰り返される非日常的な出来事が世の中の日常であるかのように錯覚するときがある。そんな時、里崎は一体日本はどうなってしまったのだろうか、どんよりとした不安に包まれ、肺に鉛でも詰まっているような息苦しさを感じるものだった。だが、春風に揺れる美しいレンギョウの花は、平和な日常がちゃんと日本中に溢れているということを、里崎に思い起こさせるかのように優しく語りかけてきた。里崎は、華やかに輝く黄色い花々にエネルギーをもらうと、軽く微笑み、気持ちを新たに家庭訪問に向かった。

本庁の各課室も異動表が配られると一気にざわつき始めていた。自分の名前が載っているのか載っていないのか。望んだ人事だったのか、望まない人事だったのか。さまざまな思いが室内を錯綜さくそうしている。

田丸は、異動表の中に自分の名前を確認すると、満足げな表情を浮かべながら課長の机に歩み寄った。

「課長、ありがとうございます。希望を叶えてくださって」

「何が希望を叶えてくださった。言い出したら聞かないからどうしようもないじゃないか。お前に拔けられると、うちとしては大損失なんだぞ。断腸の思いで兎相に出したんだからな。しっかりやらんと承知しないぞ」

「はい。無理を言って申し訳ありませんでした。全力で頑張つてきます」

田丸は課長に一礼をすると、席に戻り、後任への引継書を作り始めた。

福祉専門職の田丸にとって、ほとんどが事務屋の児童家庭課は違和感のある場所だった。

特に、児童相談所の主管課である児童家庭課においてさえ、現場の実情がほとんど理解されていないことは大きな驚きだった。危機感を覚えた田丸は、決して諦めることなく、現場の状況を一つひとつ周囲に説明しながら、事業の内容や予算の配分の適正化に努めた。また、国への補助金交付申請や市町村への補助金交付決定事務や、議会で質問が出た際の答弁書作

りといった不定期な事務もこなし、秋口からは財務課の予算担当を相手に予算確保のための交渉を繰り返し広げた。

こうした、事務屋が一年を通して日常的にこなしている仕事は、大量の資料作りと、会議の繰り返しで構成されている。田丸は、そうした事務屋の仕事も卒なくこなし、周囲からの信頼も厚かったが、なぜか充実感は得られずにいた。

特に里崎が児童相談所に異動となり、彼からさまざまな相談を受けるようになってからは、自分が命を燃やす場所はここじゃないと感じることが多くなった。田丸の児童相談所への思いは募る一方で、事あるごとに課長に児童相談所への異動を訴え続けるようになった。そして、ついに今日、異動表に自分の名前を載せることができた。

眠っていた熱いものが胸に込み上げてくるのが感じられた。二年ぶりの現場か……。やっと思えるんだ。この二年でずいぶん忙しくなってるから、大変だろうな……。まあ、ビシビシ鍛えてやらないといけない奴が一人いるから、気合い入れていくか。田丸は軽く笑みを浮かべると大きく深呼吸をした。

相棒

里崎は、朝から珍しく姿見の前に立っていた。ネクタイをしつかりと締め、ジャケットに

袖を通すと襟えりに手をやり服装を整えた。

「今日から一緒か」

里崎は鏡に映る自分の姿を見ながら、息を吐くように静かに呟くと、玄関のドアを開けた。透き通った春の光と暖かく澄んだ風が差し込んできた。土手の桜の太木は、まだ三分咲きといたところだ。一年前、少し不安混じりの心を抱えながら同じ景色を見たことが思い出され、どこか感慨深いものがあつた。里崎は朝日に照らされる桜を見上げながら、ゆっくりと車に向かった。

事務所について、見慣れた暗い階段を上り始めると、なぜか心がドキドキしてくるのを感じた。事務所の景色や雰囲気ふんいきがいつもと違って見えるような気がした。

階段を上り切ると、入り口のガラス越しに、思いもよらぬ光景が里崎の目に飛び込んできた。

緑川と後藤が見たことのないような不安げな顔つきで、長谷部課長の机のある方向を見つめていた。すると、ガラス越しに里崎の耳にも届く大きな声が響いてきた。

「どうしてですか！ 納得できません！」

聞き覚えのある声だった。里崎は急いで入口に向かい、そつとドアを開けた。緑川と、後藤は一瞬里崎に目をやったが、すぐに視線を元に戻した。

「何で、私が児童心理司なんですか！ ワーカーをやらせてください！」

「駄目よ。あなたには児童心理司をやってもらいます」

田丸が長谷部課長に激しく詰め寄っている姿が見えた。

「どうしたの？」

里崎が小声で緑川に尋ねると、緑川は泣きそうな顔で里崎を見たが、すぐに田丸の背中を食い入るようにつめた。里崎は、仕方なく暫く黙って事の成り行きを見守ることにした。

「私はワーカーがしたくて戻ってきたんです。課長だってそれはわかっているはずですよ！」

「もちろんわかっているわよ。でもあなたは福祉職でしょ。これから兎相を背負ってもらわなといけない人よ。ワーカーだけやってりゃいいってわけにはいかないでしょ。検査にも熟練して視野を広げなさい」

「だったら、来年から心理司やりますから、今年はワーカーをやらせてください」

「駄目！ あなたは判定係に配属されたの。これはもう決まったことよ」

「そんなあ……」

田丸は唇をキッと噛みしめて判定係の席に着いた。机の上で田丸の拳こぶしは強く握られていた。全身から悔しさが陽炎かげろうのように立ち上っているかのようだった。

里崎は田丸に近づくと、静かに話しかけた。

「大切なことなんじゃないのかな。仕事の幅を広げるのは。その方が……」

「うるさいわね。あんたに何がわかるのよ」

里崎の言葉を遮るように田丸は苛立ちを纏った低い声を残して、事務所を出ていった。「まったく！ 里崎さんに何がわかるんですか！」

「そうですね、何がわかるんですか？」

緑川と後藤も間髪容れずに里崎に言い放つと、田丸の後を追った。

「何だよ、どいつもこいつも！」

里崎は憤然たる面持ちで勢いよく言葉を吐き出した。

長谷部が苦笑いを浮かべながら里崎に歩み寄った。

「ごめんね、里崎さん、八つ当たりされちゃったわね」

「課長、田丸に児童心理司をやらせるんですか？ ワーカーの方が向いてるんじゃない？」

「そうかもしれないけど、彼女は福祉職だからね。どっちもスペシャリストになってもらわないと。両方やって見えてくるものもたくさんあるはずよ。彼女には里崎さんの担当地区をお願いしたから、仲良くやってね」

「え！ 田丸とチーム組むんですか！」

「ええ。今年度からは彼女が里崎さんの相棒だから。しっかりね」

長谷部課長は、里崎にとつては非常に重要なことを、驚くほどあっさり伝えると、何事もなかったように席へと戻っていった。

「田丸が俺の相棒か……何か、ヤバそうな気がする」

里崎は一抹の不安を覚えながらゆっくりと自分の席に向かった。

二、三分すると、田丸が緑川と後藤を従えて事務所に戻ってきた。里崎は田丸と顔を合わせぬようパソコンの画面をじっと見つめていたが、足音が自分に向かって近づいてくるのを感じていた。

「さつきはごめん。感情が高ぶっちゃって」

田丸がばつの悪そうな表情で里崎を見下ろして言った。里崎はゆっくりと田丸の顔を見上げると、暫く黙ってその顔を見つめていた。

「何よ……何で黙ってるのよ」

「別に……お前が素直に謝ることもあるんだなと思って」

「失礼な……こういうのが今年の相棒かと思うと、憂鬱だわ」

田丸は、右の目だけを少し細めながら、気だるそうな低い声で不満を奏でた。

「こっちのセリフだよ！」

「ふん、嬉しくせに。馬鹿。ともかく一年間よろしくね」

田丸の表情には、悔しさに代わって、闘志が浮かんでいた。さすがに切り替えが早いな。里崎は心の中で敬意を込めてそう呟いた。

田丸は席に戻るとWISC IVの検査用紙を引き出しから取り出し、勉強を始めた。里崎はそんな田丸の様子を暫く見つめていた。あの静御前が今年の俺の相棒か……。余程気合いを

入れないといかん。里崎は頼もしい相棒を見つめながら大きく深呼吸をした。
新年度は、小さな波乱含みで幕を開けた。

幽霊

翌朝、里崎が事務所のドアを開くと、何事もなかったように机に向かう田丸の顔が見えた。その表情はスイッチの切り替えが完全に完了したことを語っていた。里崎はコーヒーを二杯入れると、一つを田丸の机に運んだ。

「何よ？ 言っときますけど、落ち込んでなんかいませんから」

「わかってるよ。お前は俺のすることには常に苛立ちを覚えるのか？」

「別に……。柄にもないことするからよ」

「失敬な！ 俺は気配りの聡ちゃんと言われているんだぞ！」

緑川が眉を八の字にしながら呆れ顔で会話を割り込んできた。

「どこが気配りの聡ちゃんなんですか、目障りの聡ちゃんの間違いでしょ！」

「きゃははははは。緑川さん、里崎さんがかわいいそうです。せめて、木偶の坊の聡ちゃんぐらいにしてあげてくださいよ」

緑川の言葉に間髪容れず、後藤が反応した。

里崎は、昨年度よりも敵の攻撃力が格段に上がっているのを感じた。しかも、今年度は優秀な司令官も赴任してきている。統制のとれた攻撃がなされるのは火を見るより明らかだった。厄介だな……。里崎はヘラヘラと笑っている後藤の顔を見ながら心底そう思った。

「田丸、近いうちに所管地域の学校を回ろうと思うんだけど、都合はどうだ？」

里崎は三人がかりの攻撃が長引く前に、話を仕事に向けた。

「そうね、早い方がいいんですけど、来週にしない？ まだ、春休み中ですよ。折角行くんだから、子どもの様子も見れる方がいいでしょ」

「それもそうだな。じゃあ、来週にするか。家庭復帰している虐待ケースを見守ってくれている学校を中心に回ろうと思ってるんだ。ケースファイルにザッと目を通しておいでくれるか？」

「了解。ケースファイルを私の机に置いてくれるかな」

「わかった。後でまとめておくよ。よろしく頼む」

田丸は微笑みながら黙って頷いた。

一週間後、二人は朝から学校訪問に向かった。里崎は最初の訪問先である青山小学校へ車を走らせた。

校門の両脇には、新入生を迎え入れたばかりの立派な桜が春の喜びを全身で表すかのよう

に花を満開にさせていた。勢いよく伸びた枝々は、校門の上で重なり合い美しく、華やかなピンクのアーチを創り出していた。

「綺麗だなあ……」

田丸がうつとりとした様子で桜のアーチを見上げながら言った。

田丸の言葉につられて、里崎も桜のアーチを見上げていると、グリーンスリーブスを合唱する子どもたちの軽やかな歌声が風に乗れり、花々を揺らしながら舞い降りてきた。野を越え山を越え人々に幸せを届けるかわいらしい天使たちの様子を歌声は綴っていた。里崎はそのかわいらしい天使たちの姿を、右へ左へと舞い踊る、愛らしい桜の花びらの中に見出していた。うらかな春の一日だった。

こんなに平和そうな学校も虐待ケースの見守りを担っているのだと思うと、里崎は少し気が重くなった。

里崎が門柱に据え付けられたインターホンを押すと、教頭が応答し、正門脇にある勝手口の鍵を開けてくれた。里崎は慣れた足取りで校長室へと向かった。

校長室に向かう廊下からは校庭が見えた。低学年と思える児童が赤白帽をかぶって元気にサッカーを楽しんでいる。子どもたちが広い校庭を所狭しと走り回る姿は、とても和やかな風景だった。

「こんにちは。失礼します」

「こんにちは、里崎さん。相変わらずお忙しいですか？」

「ええ、相変わらずです。校長先生はお元氣そうで何よりです」

「里崎さんも、お元氣そうで。一緒においでいただいたのが、田丸さんですね」

「はじめまして、田丸と申します。よろしく願いいたします」

「こちらこそ、よろしく願いいたします。校長の甲斐と申します。うちは児相さんには本当にお世話になってるんですよ。田丸さんにもいろいろご面倒をおかけするかもしれませんが、よろしく願いします」

「実は、田丸と僕は同期入庁なんです。もともと彼女は僕と違って、福祉専門職として採用されていますから、児相の仕事については僕よりずっと詳しいんですけどね」

「それは頼もしいですね」

「私なんてまだまだひよっこですから」

「ご謙遜を。里崎さんの様子を見てればあなたがどれほどすごい人かはよくわかります。それにその目。誠実さと意志の強さが漲ったいい目をしてらっしゃる」

「はははは……。確かに、意志の強さは半端じゃないですよ！もう、恐ろしいほどです」

「もう、余計なこと言っていないで、話を進めなさい！」

「まあ、こんな感じなんです。では、本題に入りますけど、各ケースの経過はどうですか？」
「いいですよ。ほんとにいいです。どのケースもケアネットがちゃんと機能していますから。担

任や、民生委員、主任児童委員や、市役所職員の家庭訪問もちゃんと受け入れてくれています」

「それは何よりです」

「個別に言いますと、綾香ちゃんは毎日学校に登校してますし、以前のように不衛生な感じは全くないですよ。お風呂にも入ってるようで、臭いが気になるようなことはなくなりましたね。担任が家庭訪問した際もいつも部屋はそこそこ綺麗きれいにしているようです。」

「嬉しいな」里崎は素直な笑顔を見せた。

「生活保護をかけてもらえたおかげで、経済的に安定しましたから、お母さんの鬱うつもかなり良くなったみたいです。最近アルバイトでガソリンスタンドで働くようになって就労意欲も出てきてますから、ネグレクトに逆戻りする可能性は少ないと思います」

「そうらしいですね。あのお母さんがバイトできるなんて、想像もできませんでしたよ」と里崎は嬉しうれそうに笑った。

「裕也君も家庭復帰してからこれまで、一度も痣あざを作ってくることはありませんし、本人の表情も明るくなりましたね。敵対的だったお母さんも学校の話をよく聞いてくれるようになりましたし、お母さんの方から担任にいろいろ相談してくれるようになりましたね。どちらのお母さんもよく頑張ってると思いますよ」

「そうですか。うちへもよく相談してくれてますよ。子育てでも仕事でも、気になることが

あると、すぐに電話をくれるようになりました。裕也君のお母さんは、ストレスで叩たたきそうになると必ず電話をくれるんです。それで上手くガス抜きができるようになりましたよね。ずいぶん成長したなあと思って思いますよ」

「ほんとにそうですね。裕也君を職権で一時保護した後には、お母さんが鬼おにのような形相ぎやうそうで学校に乗り込んできたのが、今じゃあ懐かしい思い出ですよ」

「確かに怖かったですね。僕も面接室で二時間以上怒鳴りつけられましたから」

「綾香ちゃんの家も、裕也君の家も結局のところ社会と切り離されてしまって、孤立し、苦しんでいたんでしょうね。切れた糸を里崎さんが丁寧ていねいに繋つないでくれた。家庭引き取りを提案されたときは、正直不安でしたよ。何かあったらどうしようってね」

「どのケースも家庭復帰は本当に心配しますよ」

「でも、里崎さんがたくさんの関係機関による個別ケース検討会議を開いて、ケアネットを構築していく様子を見せていただいたので、本当に勉強になりました。孤立して苦しんでいた家族を地域社会が協力して支えていくことが、子どもたちに普通の生活を取り戻すために如何いかに大切なことなのかを教えるようになりましたよ」

校長が里崎を深く信頼している様子が窺うかがえた。

「そんな、教えるなんて。児相はほんの少し段取りをするだけです。地域社会の援助がなければ、僕たち児相の仕事は成立しませんから」

「関わる家庭ごとに一番適した関係機関によるケアネットを構築するわけでしょ。調整だけでも大変ですよ。以前、里崎さんが言っていましたね。児相のケースワーカーは何があっても関係機関と採めないんだって」

「ええ、それは鉄則です。感情的になって関係機関と喧嘩をしたら、それだけ子どもと家庭を見守る機関が減ってしまうことになりませんか」

「児相の仕事は人間力を試されるような仕事なんだとつくづく感心させられましたよ」

「要するに児相は、関係機関や地域とチームを組まないと、本当にお手上げってことです」

「まあ、あなたのそういう人柄が地域に良いチームを作らせる理由なんでしょうね」

田丸は、里崎と校長の信頼関係を見て、里崎がこの一年でずいぶん成長したのだと感じていた。

虐待対応の中心は、子どもを一時保護することではない。もちろん、子どもの命を救うために一時保護が極めて重要であることは言うまでもない。しかし、子どもたちの将来を考えると、本当に大切な仕事は何なのか？

保護して、施設に入所してもらうことなのか。乳児院や児童養護施設での生活には多くの制約があり、限界がある。子どもたちに今より明るい将来を感じてもらうためには、難しくとも、可能性がある限り家庭復帰を試み、子どもと家族を地域社会に帰し、少しでも普通の生活を取り戻してもらおう。それこそ、児童相談所が全力で取り組むべきことだ。

社会とはぐれ、苦しんでいた家庭を社会と繋ぎ、地域社会もそうした家庭の苦しみを理解して支える。そんなチームを地域社会に作っていくことこそ、児童相談所の虐待対応の真髄なのだ。

里崎は、田丸が思っていた以上にそのことをよく理解しているようだった。思ったより頑張ってるじゃん。田丸は笑みを浮かべながら、黙って里崎の横顔を見つめた。

感慨深げに見守る田丸をよそに、里崎は校長と話を続け、各ケースの現状について一通りの情報交換を終えた。

「ありがとうございます。経過観察については、引き続きよろしく願います」

「わかりました。もし、何かあればすぐに連絡するようにします」

「ほかに何か気になることはありますか？ 些細なことでもいいんですが」

「んーそうですねえ。まあ、ほんとにどうでもいいような話なんですけど、ここ三週間ほど妙な噂が流行ってましてね」

「妙な噂ですか？」

「ええ。里崎さんもご存じのとおり、最近はずいぶん子どもたちも夜遅くまで塾通いをするでしょ。そういう子どもたちの何人かが、幽霊を見たという噂がありましたね。季節外れなんですけど、子どもたちが如何にも好きそうな怖い話なんで、校内ではかなり噂になってるんですよ」

それまで黙っていた田丸が急に口を開いた。

「幽霊が出る場所はバラバラですか？ それともどこかに限定されてるんでしょうか？」
 「場所は決まってるんですよ。ほら、柳町の武道場があるでしょ。あの隣に小さな公園があるのをご存じですか？ あそこなんですよ」

「ああ、ありますね。とても小さな公園で、ブランコとジャングルジムぐらいしかなかったんじゃないかな」

田丸はしっかりと場所を把握している様子だった。

「そうなんですよ。あの公園近くを夜中に通りがかった子どもたちが、ブランコに乗ってる女の子の幽霊を見たって言うんです。真っ白な顔をしていて、服には血がべつとりと付いていたって言うもんですから、あつという間に噂が広がって。子どもの想像力は逞しいですから、今じゃあ相当尾ひれが付いてると思いますけどね」

「そうですか。あの公園で夜中に女の子の幽霊が……。時間は何時頃なんでしょう？」

「見たという子は、みんな十一時を過ぎていたと言ってますから、かなり遅い時間ですね。まあ、何を見間違ったのかわかりませんが」

「十一時過ぎか……。幽霊は女の子だけですか？ 母親の幽霊とかは？」

「はははは。子どもだけです。親子の幽霊を見たという話は、今のところ聞いてませんね。もつとも、今の勢いじゃあ、いつ、幽霊家族になるかわかりませんがね」

「はははは……。まったくだ」

里崎は、子どもが好きそうな馬鹿な話だといった風に笑いながら言った。しかし、田丸はまじめな顔でさらに質問を続けるのだった。

「幽霊と話したり、声を聞いた子はいませんか」

「さすがに怖くてそれはできなかつたみたいですよ。田丸さんはずいぶん幽霊に興味があるんですね」

「いや、そういうわけじゃないんですが……。何でも気になる性格で……」

里崎は少し呆れた様子で話に割って入った。

「もういいだろ、田丸。校長先生、長時間お邪魔しました。そろそろ失礼しますが、何かありましたらいつでも連絡してください。緊急の場合は、誰にでもいいですから連絡してくださいね。よろしくお願いします」

「わかりました。じゃあ、里崎さん、田丸さん、今後ともよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

校長は大切な友人にそうするように二人を玄関まで送ってくれた。

「なあ、田丸。お前もしかして幽霊信じてるのか？」

里崎が少し茶化すような口調で田丸に尋ねた。

「全く信じてない」

「じゃあ、どうしてあんなつまない幽霊話に食いついてたんだよ」
「信じてないから、食いついてたのよ。子どもたちに見えるってことは実体が存在するからでしょ」

「じゃあ、本当に幽霊を見たってことか？」
「里崎君、ときどきすぐく馬鹿になるのね。そうじゃなくて、実際に女の子が公園にいたってことよ」

「どこの子どもが夜中の十一時過ぎに公園で遊ぶんだよ。風に飛ばされたレジ袋でも見たんだろ」

「夜中に何度も偶然レジ袋が飛んでたの？ どうにも気になるのよね」

「……」

二人は、青山小学校の後、さらにもう一校小学校を訪問し、昼食後に中学校二校と小学校一校を訪問した。いずれの学校でも数件の虐待ケースが家庭引き取り後の経過観察状態であり、二人はそうしたケースについて情報交換を行った。最後の小学校訪問を終えた頃には、夕方四時を過ぎていた。

「お疲れさん。初対面の人も多かったし、ずいぶん、疲れたんじゃないか？」

「確かに、思った以上に疲れたわね。でも、どのケースもしっかりとケアネットが構築されていて感心しちゃった。虐待対応の肝は如何にしっかりと機能するケアネットを作れるかに

あるからね」

「褒めてるのか？ 記録をとりながらもよく観察してるんだな」

「まあね。お手並み拝見ってとこだったけど、意外にも頑張っていることがわかって驚いたわ。やっぱり、指導者が素晴らしいと、少々使えない男でも成長するのね」

「その指導者っていうのは、お前のことか？」

「ほかに誰がいるのよ」

「嫌な女だねえ」

「いい女の間違いでしょ！」

田丸との会話を楽しんでいた里崎の表情が少し硬くなった。

「ただ、最近の虐待通告の急増で、児相は沸騰状態だ。以前のようにケアネットの構築に十分な時間をかけられなくなっているんだよ。本来は児相が中心になってケアネットを作るのが基本なんだが、要対協（要保護児童対策協議会）を活用して、市町村にネット構築のマネージメントをお願いすることも増えているのが現状だ。そのことが児相のワーカーの大きなストレスの一つになっている」

「児相は本来福祉の専門機関だもんね。クライアントと一緒に悩みながら少しでも現状よりいい道を探したり築いたりしていくことを児相の仕事の醍醐味だもの。ワーカーも本当はそういう仕事を全力でやりたいと思ってる。でも、現状は違うってことね……」

「忙しすぎるんだよ……」

里崎が力なく言った。

「虐待通告に追われ、一つひとつのケースに関わることができず時間はどんどん少なくなってきた。このジレンマに多くのワーカーが苦しんでるわけね。虐待家庭の再統合をきっちり時間をかけてやっていきたいのに、止むことのない虐待通告がそれを許さない。虐待家庭への支援を虐待通告が許さないか……。何だか皮肉な話よね」

「立ち入り調査を含めて、虐待の初期対応は警察が行って、児童を保護した後の支援を児相が担当するようになればもう少しきっちり支援ができると思うんだけど」

里崎は叶うことのない希望を語るように静かに言葉を吐いた。それはため息にも似ていた。「立ち入り調査や職権の一時保護をやって親と対立した人間が、今度は家庭の再統合を手伝わせてくださいっていうこと自体、常識で考えれば無理があるわよね」

「警察も次から次へと仕事を増やされたら堪らないだろうけど。素人の俺たちが防刃チヨツキをつけて立ち入り調査するよりは、ずっと理にかなってると思うんだよね……」

「確かに。私たち、ただの公務員だものね。正直、立ち入り調査に行くのはかなり怖いよね。そのあたりの役割分担はできた方がいいのかもしれないけど……。でも何かちょっと寂しい気がするな、私は……。苦しくて辛い場面から全部関わりたいのよね……」

「お前は心底福祉職だな。尊敬するよ」

「あんたもほとんど同類よ。気づいてないようだけど」

「俺なんて、まだまだだよ」

「確かに、まだまだだね。ふふふ……」

里崎は、にこやかに話す田丸の表情をちらりと眺めながら、これほど大変な仕事に情熱的に向き合っている田丸たち福祉職の信念の強さに尊敬の念を抱いていた。

命の糸

事務所に戻ると、里崎の机にも、田丸の机にもたくさんのメモが貼り付けられていた。まるで、インディアン（インディアン）の酋長（酋長）が頭に付けた羽飾りのようだった。田丸は疲れたそぶりも見せず、メモに書かれた電話番号に次々と電話をかけていった。里崎は、どっぶり疲れていて、コーヒー一杯ぐらいは飲みたいところだったが、田丸の様子を見て、同様に電話をかけ始めた。里崎が電話で話していると、目の前に白く美しい手がすつと伸びてきて新たなメモを貼り付けた。メモには「虐待通告あり。詳細は西村まで」と綺麗な文字で書かれていた。里崎は電話を済ませると、早速、児童心理司の西村の机に向かった。

「西村さん、虐待通告ってどんな内容？」

「それがはつきりしなくて……。深夜に子どもの泣き声を何度か聞いたから虐待じゃないか

つて……。ただ、通告者もはっきりした場所はわからないみたいで、残業からの帰り道に何度か泣き声を聞いたっていうだけなんですよね」

「それじゃあ、調べようもないな。いい加減な通告だな」

不満げな里崎をよそに、田丸が西村に質問した。

「西村さん、ほかに何か情報は？　いくつぐらいの子どもだとか、男の子っぽいとか女の子っぽいとか」

「それもはっきりしません。小学生ぐらいの子どもとしか」

「場所はどのあたり？」

里崎が少し困惑した表情で田丸に話しかけた。

「ちよっと待てよ、田丸。そんなこと聞いても、はっきりした場所すらわからないんじゃないか調べようがないじゃないか」

「ある程度の場所が絞り込めれば、ともかく現場付近に行つて状況を確認するべきよ。周辺を歩き回れば何かわかるかもしれないでしょ」

「でも、こんないい加減な通告にいちいち反応してたら身が持たないだろ」

「いちいち反応するの！　場所は？」

「木挽町です。県道を北に行くとき青木の交差点がありますよね。コンビニがある。そこを右に入ったら、二つ目の信号を左に入ると細い路地が続いてるらしいんですが、右側にたばこ

屋があつて、その辺りで聞こえたつてことです。十二時前後でずいぶん遅い時間だから気になったようで……。これ、付近の地図のコピーです」

「さすが、西村さん、気が利く。木挽町か……。行こうか、里崎君」

「え？　今から？　今帰つてきたとこだぜ。それにすぐに暗くなるよ、おい、ちよつと。マジかよ、まったく」

「里崎君、急いで！　暗くなる前に周囲の様子を見ておきたいから」

「明日でもいいじゃないか。どうして、今から。それにお前ワーカーじゃないだろ」

「つべこべ言わない！　一日違いで後悔するのは嫌でしょ！　さあ、早く乗って！」

里崎は、こうなると田丸を止めることはできないと観念して、仕方なく車に乗り込んだ。「なあ、田丸。あの程度の情報じゃあ、さすがに何もわからないじゃないか。調査しても無駄じゃないのか？」

「もらった通告がいい加減だったり、たちの悪いいたずらの場合もある。だけど、どの通告が深刻で、どの通告が深刻じゃあないかなんて、後にならなきゃわからないでしょ」

「しかし、いくらなんでもこんな適当な通告まで……」

田丸は真剣な眼差しで里崎を見つめて言った。

「取るに足らないように思える通告が実は深刻な虐待に繋がつてる場合があるのよ。通告は、神様がワーカーに投げた命の糸よ。世の中からはぐれてしまったケースに気づいてくれと届

けられた命の糸なのよ。それを大切に手繰^{たぐ}っていくのが見相のワーカーの仕事でしょ」

「命の糸……」

「しつかりアンテナを張って慎重に探せば、糸は徐々にはつきりと見えてくる。糸が見えるかどうかはワーカー次第よ。必死で見ようとしないと見えないわよ。それにしても暗くなるのが早いな。周囲の細かな雰囲気^{ふんいき}まで掴^{つか}むのは難しそうね」

五時前に二人は現場付近に到着した。日は山際に近づき、周囲は茜色に染まりつつあった。田丸は通告にあったたばこ屋を見つけるとその周辺を猟犬のように歩き回った。数件の古い木造の集合住宅が気になるのか立ち止まっては電気のメーターなどをチェックしていた。

「泣き声なんて聞こえないな。なあ、田丸、やっぱり虐待とか関係ないんじゃないのか？」

「……」

田丸は黙々と辺りの様子を探っていた。

「おい、聞いているのか？」

「よし。だいたいこんなところかな。いったん事務所に帰りましょ」

「え？ もう帰るのか。でも、いったんってどういうことだよ？」

「里崎君、今日は忙しい？ 夜中にもう一度来ようと思っただけ。忙しかったら私だけで来るから」

「夜中に来るって……。俺の担当地区のケースなんだから、来るのはやぶさかじゃないよ。た

だ、その必要があるのか？ 無駄^{むだ}じゃないのか？」

「無駄かもしれないけど、どうにも気になるのよ」

「何が気になるんだよ！」

「まあ、道々話すわよ。乗って」

田丸は車を運転しながら静かに話し始めた。

「里崎君、西村さんがくれた地図見た？」

「見たよ、もちろん」

「ちゃんと見た？」

「だから見たって言うてるだろ！」

「じゃあ、気づかない？ 木挽町と柳町が隣接してるってこと」

「確かに隣接してるよ。そんなの行政区画が変わらない限りはずっと隣接してるだろ。それがどうしたんだよ？」

田丸は里崎が持っていた地図の一点を指さした。里崎はその指先を見てハツとした。

「市立武道館……。あっ！ これは青山小学校で聞いた幽霊が出る公園の隣だ」

「そう。今回通告のあった場所は、幽霊騒動の公園に意外と近いのよ。歩いて五分ほどの距離よ」

「確かに、面白い偶然だけど、幽霊騒動と虐待通告は何の関係もないだろ？」

里崎の言葉に田丸は少し苛ついた様子で言葉を継いだ。

「あなた言ったでしょ！ 夜中に公園で遊ぶ子どもなんていないって。私もそう思うわ。じゃあ、どうして子どもがそんな深夜に公園で遊ばなきゃいけないわけ？ 不自然でしょ。夜中に遊ばなきゃいけない理由があるはずなのよ」

「夜中に公園で遊ぶ理由？」

「昼間にほかの子どもと一緒に遊べない理由。要するに普通の家庭とは違う状況で生活することを強いられている女の子がこの周辺にいるってことじゃない。虐待通告と、幽霊騒動。関係ないと思う？」

「そう言われると逆に関係ないと思える方が不自然かも……。お前、すごいな。いつ気づいたんだ」

「西村さんから、場所が木挽町って聞いたときに場所によっては関係あるかもって思ったのよ」

「地図を見たら意外に近かった。だからすぐに現場周辺の状況を確認したかったってことか」

「そういうこと。暗くなってからだと町の状況が掴みにくくなるから」

里崎は改めて田丸の洞察力に感心させられていた。

「それで、これからどうするんだ？」

「まあ、事務所に帰って、仕事をしましょ。やることはいっぱいあるんだから。十時半ごろ

再出発することにしない？」

「わかった。もし、泣き声とかが聞こえたらどうするんだ」

「家が確定すれば突撃訪問する。まあ、そう上手くはいかないと思うけど」

「わ、わかった。でも、お前はワーカーじゃなくて児童心理司だろ。調査は俺がやるべきだと思うんだが……」

「乗りがかった船じゃない！ 私はあなたの相棒なんだし。もし、子どもに会うようなことになったら、発達面を確認するのは私の仕事でしょ」

「まったく、強引な理由づけだなあ。まあ、いいか」

事務所に戻ると、里崎は黙々と記録を書き続けた。先ほどまでの調査などなかったかのようにキーを打ち続けている。時折かかってくる電話にはその都度真摯に対応し、電話が終わるとまたキーを打った。まるでテレビのチャンネルを切り替えるように自分の思考を切り替えてながら仕事を続けた。田丸はそんな里崎の仕事ぶりを見て、事務屋のくせに、ずいぶんワーカーらしくなったものだと思いを細めた。

○ 続きはご購入ください ○